

城北中学校・高等学校

連帯感を育む校風ときめ細かな指導が

難関大学への 高い進学実績に結実

「人間形成と大学進学」を教育目標に掲げ、80年近い伝統を積み上げて
いる城北中学校・高等学校。今春も、東大12名をはじめ、難関大学に多数
の合格者を送り込んでいる。高い進学実績を支える同校の教育の特色
について、進路指導部長の加門康徳先生に伺った。



**中高6年間で3期に分けて
成長に応じた指導を展開**

高校での生徒募集を行う併設型の男子一貫校だが、中学から入学した生徒（中入生）と、高校から入学した生徒（高入生）を上手く融合させることで、独自の校風を作り上げている。それを支えているのが、6年間で2年間ずつ3期に分けて指導する教育システムだ。

中1・2は「基礎期」で、学習習慣と生活習慣をとともに確立させることが目標だ。英数国を中心に毎日のようにプリント課題を出し、翌日チェックするというルーティンを繰り返すことで、家庭学習の習慣を身につけさせていく。同時に、6年間一緒に過ごす仲間として、集団生活におけるルールも丁寧に教えていく。

「最初に正しい学習習慣や仲間との付き合い方をしっかり学ぶことが、受験期を乗り越える大きな力になっていると感じています」と加門先生は語る。

中3・高1は「錬成期」で、中3になると高校の校舎に移り、成績優秀者の選抜クラスも設置される。高入生は、中入生とは別クラスで、1年間で中入生に追い付くようなカリキュラムで学ぶ。この時期には、将来を見据えた上で進路を選択できるように、大学見学や職業体験、保護者講演会なども数多く用意している。

高2からの「習熟期」は、中入生と高入生が混ざって文理分けが行われ、高3からは、文系、理系ともに国公立向けと

私立向けにクラス編成となり、多彩な選択科目を組み合わせて学ぶことになる。

ここで力を発揮するのが自習室の存在だ。ゼミ室や理科実験室などが自習室として開放されるため、生徒たちは頑張っている仲間と励まし合いながら、一緒に合格しようという機運を醸成していく。

「本校は仲間同士の連帯感が強く、たとえば国公立大の前期日程で合格した生徒が、後期日程に向けて勉強する仲間の勉強を助けに来るといった光景が、当たり前のようにあります」（加門先生）

**頻繁な面談で情報を共有し
希望進路の実現をサポート**

教員も生徒に寄り添ってきめ細かなサポートを行っている。高1から全員受験の校外模試の他に、任意受験の模試も積極的に受けるように指導し、受験への意識を高めていくとともに、基本的な内容が理解できていないかを生徒と一緒に確認しているほか、少し

でも気になることがあれば、すぐに面談を行い、生徒と情報共有を図るなど、常に生徒の姿に目を配り、その都度、適切な指導を行っている。

「進路は生徒の希望が最優先ですが、高いポテンシャルがあるのに、楽な方向に流れる生徒には、挑戦した先に拓ける未来があることを伝え、チャレンジの大切さを説くようにしています」

高3の8月には、希望者を対象に、長野県大田市にある学園所有の山荘で、9泊10日の勉強合宿も行っている。教員も順に帯同するが、講習は行わず、生徒はひたすら自習に励む。「自ら学ぶ姿勢がなければ、難関大学の入試は突破できない」という認識を、生徒も教員も持っているからだ。

緑豊かな住宅地に広がる4万㎡もの広大な敷地も魅力だ。50もの部活があり、生徒たちは、課外活動にも存分に力を注いでいる。目標を共有し、助け合える仲間の存在と、それを支える教員、それらを可能にするキャンパス環境が、高い進学実績を可能にしているのだろう。



生徒たちの進学相談に応える進路指導部部長の加門先生



中1は大町オリエンテーション、中3は夏期林間学校、そして高3は大町学習室と、大町山荘では6年を通じてさまざまな行事が行われる